

〔論文〕

# 認定こども園における 子育て支援の母親に及ぼす影響

楠本 洋子  
Yoko Kusumoto

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科 児童保育専攻

**要旨：**本研究は、認定こども園における子育て支援の母親に及ぼす影響を考察するために、二つのアプローチを試みた。それは「母親の友人づくりへの影響」と「預かり保育の影響」である。まず「母親の友人づくりへの影響」については、居住年数3年未満と3年以上に分けて比較分析した。その結果、3年未満は3年以上より「子育ての技術不足や育児不安などの悩みが多い」こと、「友人の支えが少ない」にもかかわらず、「子育てに積極的に関わり、子育てを肯定的に捉え、充実した子育てをしている」ことが明らかになった。また子育て支援に参加して友人が増えた母親も多いことから、母親の友人づくりを盛り込んだ子育て支援の必要性が考察された。

次に「預かり保育の影響」については、利用者と未利用者、それぞれに専業主婦と就業者に分けて比較分析した結果、未利用者に「育児肯定」が高いことが分かり、その理由としては未利用者の就業者の「親族の支え」との関連が挙げられた。次に預かり保育利用者が子育て支援に参加して「遊びの幅が広がった」、「子どもへの接し方に余裕ができた」、「参加が楽しみである」の3項目に肯定的評価があった。さらに対象園の8割以上の母親が利用している「預かり保育」は、子育て世代の多忙な母親にとっては必要な子育て支援であると考察された。

キーワード：認定こども園、子育て支援、母親の子育て意識、母親の友人づくり、預かり保育

## 問題の所在と目的

子育て支援が始まって20数年が経とうとしている。この支援の開始当初に出生した乳児が成人に達するという時間が流れたといえる。その間の子育て支援の変遷は、行政による少子化対策として「エンゼルプラン」の策定から始まり、「新エンゼルプラン」策定、「次世代育成支援対策推進法」制定、「子ども・子育て応援プラン」策定、「待機児童ゼロ作戦」推進、さらに親の就労と子育てが両立する「ワーク・ライフ・バランス」という支援に発展し、子育てを包括的に支援する保育施策の充実・強化へ影響を及ぼしている。一方保育施設における子育て支援は、子育て代替支援から始まり、子育て・親育ちの必要性が論じられ、現在は地域の人々に施設を開放してコミュニケーションを重視した支援に力が注がれてきている。

これらの集大成として、保育・教育における大きな制度改革といえる「子ども・子育て支援新制度」が平成27年4月に施行された。

この新制度の背景と課題について、前田正子は「日本の子育て支援が量・質ともに不足していることや、子育ての孤独感や負担感が増していること、育児期に女性の

労働率が下がるM字カーブが解消されない一方で、保育所の待機児童がなかなか解消されず、子育て支援が財源も含めて縦割りとなっており、全国一律の基準では地域の実情に応じた子育て支援が提供しにくくなっている、などといった課題がある<sup>1)</sup>」と指摘している。

このことに対応するかのよう、内閣府は、新制度について「すべての子どもたちが笑顔で成長していくために、すべての家庭が安心して子育てでき、育てる喜びを感じられるために、1.『認定こども園』の普及を図ります。2. 保育の場を増やし、待機児童を減らして、子育てしやすい、働きやすい社会にします。3. 幼児期の学校教育や保育、地域の様々な子育て支援の量の拡充や質の向上を進めます。4. 子どもが減ってきている地域の子育てもしっかり支援します<sup>2)</sup>」と説明している。

そこで本研究は、この新制度において普及を図ると謳われている「認定こども園」の子育て支援に焦点を当て、この支援が母親に及ぼす影響を考察しようとするものである。

なお、研究の対象とする園は、町開きに合わせて平成5年に開園し今年で20年が経過する幼稚園型認定こども園である。さらに平成18年には当園を中心とするニュータウン開発に伴い急激に町の人口が増え、向かいに建つ

小学校は、全校生徒数 1600 名を超える日本一のマンモス校となっている（平成 25 年現在）。そのため当園も認可定員の 20% 増まで弾力的に受け入れ、平成 23 年度からは「幼稚園型認定子ども園」となり、預かり保育、地域における子育て支援、1・2 歳児の保育の施設としても運営されている<sup>3)</sup>。特にニュータウンであるため、居住年数が短い保護者も少なくなく、子育て支援において親同士の友人づくりに配慮がなされている。また保護者の約 8 割が利用している預かり保育は保護者の要請から実施され、そのことから認定子ども園に踏み切った経緯もあり、早朝預かり保育（7：00～9：00）、平常預かり保育（14：00～17：00）、延長預かり保育（17：00～19：00）が設けられ、保護者のニーズに合わせた支援となっている。そのため、この預かり保育が保護者の子育て意識に及ぼす影響についても検証することとする。なお、子育てに携わるのは未だ母親が多いため、本研究の対象は母親とした。

よって本研究は「Ⅰ. 子育て支援の母親の友人づくりへの影響」、「Ⅱ. 預かり保育の子育て意識に及ぼす影響」の二つの視点から分析し、考察することとする。

## 研究方法

- (1) 調査対象：認定子ども園Ⅰ幼稚園通園児の母親を対象とした。
- (2) 実施期間：平成 25 年 6 月に実施した。
- (3) 実施対象数：認定子ども園Ⅰ幼稚園通園児の母親 518 名である。
- (4) 手続き：アンケート調査用紙には調査の目的・倫理的配慮を記して、無記名とし、調査に同意を得られた対象者への配布は対象園に依頼し、自宅で記入後調査用紙を対象園の回収箱に投函してもらうように依頼した。
- (5) 調査内容：「問 1 回答者の属性」、「問 2 園児について」、「問 3 子育て意識（4 件法）」、「問 4 利用している子育て支援事業について（4 件法）」、「問 5 園主催の講演や行事参加の状況」、「問 6 園における子育て支援への意見（自由記述）」の 6 観点について尋ねた。なお、「問 3 子育て意識（4 件法）」の項目については、「母親の子育て意識尺度（22 項目）<sup>4)</sup>」、「母親の育児感情尺度（7 項目）<sup>5)</sup>」、「母親の育児の振り返り尺度（9 項目）<sup>5)</sup>」、「母親の実際の育児方法尺度（7 項目）<sup>5)</sup>」、「園の子育て支援サポート（4 項目）<sup>5)</sup>」の計 49 項目について尋ねた。

## Ⅰ. 子育て支援の母親の友人づくりへの影響

### 1. 分析方法

対象園が子育て支援を実施するに当たり配慮している「母親の友人づくり」に視点を置き、アンケート調査用紙の間 1、問 3、問 6 のデータから (1) 「園に通わせている園児の状況」、(2) 「母親の子育て意識」、(3) 「母親の育児感情」、(4) 「母親の育児の振り返り」、(5) 「母親の実際の育児方法」、(6) 「子育て支援に参加して」の 6 観点より、対象園の子育て支援が母親の友人づくりに及ぼす影響を明らかにする。なお、問 3 の各尺度の因子の構成は次のとおりである。「母親の子育て意識尺度」の因子の構成は、第 1 因子「育児負担」で「子育てに余裕がなくなり、子どもにあたってしまう」などの 6 項目、第 2 因子「育児肯定」で「子育てによって、親は成長すると思う」などの 5 項目、第 3 因子「育児相談」で「子育ての悩みを親に相談する」などの 2 項目、第 4 因子「友人の支え」で「近所の友達に子どもを預ける」などの 4 項目、第 5 因子「親族の支え」で「実家の母や姉妹に子どもを預ける」などの 2 項目、第 6 因子「育児責任」で「子育ては妻の役割である」などの 3 項目で、全項目（22 項目）を質問項目とした。「母親の育児感情尺度」の因子の構成は、第 1 因子「子育て充実感」で「子育てによって、毎日の生活にはりあいができた」などの 7 項目（4 項目使用）、第 2 因子「子育て不安感」で「他の育児と比べて、自分の育児の仕方が正しいのか不安になる」などの 5 項目（3 項目使用）、第 3 因子「子育ての負担感」で「子育ては大変疲れる」などの 3 項目（「母親の子育て意識尺度」の因子と重複するため省略）を質問項目とした。「母親の育児の振り返り尺度」の因子の構成は、第 1 因子「子どもへの省察」で「普段子どもの行動をみると、子どもの性格や特徴を踏まえながらみる」などの 5 項目（5 項目使用）、第 2 因子「親自身の省察」で「自分の子育て方針を振り返り改善すべきところを考えることがある」などの 2 項目（2 項目使用）、第 3 因子「他者との比較」で「他の人の子育ての仕方をみて、自分の子育てに必要なことに気づくことがある」などの 2 項目（2 項目使用）を質問項目とした。「母親の実際の育児方法」の因子の構成は、第 1 因子「積極的・肯定的関心」で「何がよかったのか子どもに伝えながらほめる」などの 5 項目（5 項目使用）、第 2 因子「感情的な叱責」で「感情にまかせて子どもを叱る」などの 2 項目（2 項目使用）を質問項目とした。なお、問 3 の得点については、評価 4（よくある）= 4 点、評価 3（ときどきある）= 3 点、評価 2（ほとんどない）= 2 点、評価 1（ない）= 1 点とした。また問 6 の自由記述については考察で述べることとする。

2. 調査結果

有効回答数は273名で有効回収率は52.7%であった。有効回答者の属性は表1のとおりである。

(1) 園に通わせている園児の状況

子育てに地域の支援が必要と考えたと幼児の親子は地域に馴染むことが必要である。そのため、データを居住年数で分けて分析を実施することが本研究では適切であると考え、居住年数を元に園に通う園児の状況をまとめたものが表2である。表2より第1子については、居住3年未満は約7割、居住3年～5年未満は5割、居住5年以上は4割であり、居住3年未満が第1子を通わせる

割合が大きいことが分かる。さらに第2子については、居住3年～5年未満と居住5年以上が、居住3年未満より多く園に通わせている。このことから居住3年以上の母親たちは子育て経験が多いことが示唆される。さらに表3より一番多い年齢区分が居住3年未満は31～35歳、居住3年～5年未満は36～40歳、居住5年以上は36～40歳であることから、3年未満の母親は、子育て経験が少なく、年齢が低いことが分かる。そのため居住3年未満（以下、3年未満という）のデータと、居住3年～5年未満と居住5年以上を合わせたデータ（以下、3年以上という）に分割し、分析を実施することとする。

表1 有効回答者属性

属性	項目	人数 (%)	属性	項目	人数 (%)
年齢	～25歳	0 (0)	子どもの数	1人	33 (12)
	26～30歳	23 (8)		2人	161 (59)
	31～35歳	100 (37)		3人以上	79 (29)
	36～40歳	117 (43)	居住年数	1年未満	20 (7)
	41歳以上	33 (12)		1～3年未満	57 (21)
就労状況	専業主婦	185 (68)		3～5年未満	78 (29)
	フルタイム	20 (7)	5年以上	118 (43)	
	パート	68 (25)			

表2 居住年数による園児の状況

居住年数	人数	出生順位 (%)				
		第1子	第2子	第3子	第4子	第5子
居住3年未満	77	55 (71)	19 (25)	3 (4)	0 (0)	0 (0)
居住3年～5年未満	78	41 (53)	29 (37)	7 (9)	1 (1)	0 (0)
居住5年以上	118	50 (42)	41 (35)	25 (21)	1 (1)	1 (1)

表3 居住年数による母親の年齢

	年齢区分	人数 (%)
居住3年未満	26～30歳	16 (21)
	31～35歳	31 (40)
	36～40歳	25 (33)
	41歳以上	5 (6)
居住3年～5年未満	26～30歳	6 (7)
	31～35歳	31 (40)
	36～40歳	34 (44)
	41歳以上	7 (9)
居住5年以上	26～30歳	1 (1)
	31～35歳	38 (32)
	36～40歳	58 (49)
	41歳以上	21 (18)

次に得られたデータを居住3年未満と居住3年以上(以下、3年未満、3年以上と表記する)に分けて、3年未満の園児の状況を示したものが図1であり、3年以上の園児の状況を示したものが図2である。

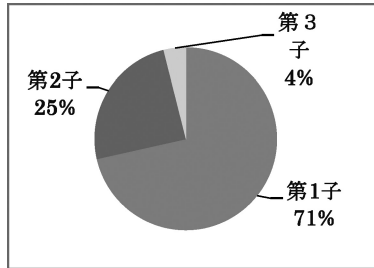


図1 居住3年未満

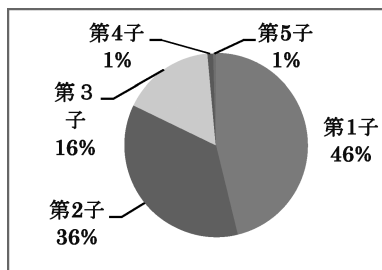


図2 居住3年以上

図1より、3年未満の第1子は55名(71%)、第2子は19名(25%)、第3子は3名(4%)の計77名である。なお、対象園に2人通わせている母親は14名で、第1子

と第2子の場合が8名、第2子と第3子の場合が6名であり、この場合は上位の子で集計した。

図2より、3年以上の第1子は91名(46%)、第2子は70名(36%)、第3子は32名(16%)、第4子は2名(1%)、第5子は1名(1%)の計196名である。なお、対象園に2人通わせている母親は46名で、第1子と第2子の場合が32名、第2子と第3子の場合が14名であり、この場合は3年未満と同様に上位の子で集計した。

(2) 母親の子育て意識

得られたデータの3年未満77名と3年以上196名を「母親の子育て意識尺度<sup>4)</sup>」で比較分析した結果は表4のとおりである。

表4より、第3因子「育児相談」において、3年未満が3年以上より平均値が高く、 $t(271) = 5.74, p < .001$ で有意な差が見られた。第4因子「友人の支え」においては、3年以上が3年未満より平均値が高く、 $t(271) = 7.65, p < .001$ で有意な差が見られた。さらに第6因子「育児責任」においても、3年以上が3年未満より平均値が高く、 $t(271) = 3.02, p < .01$ で有意な差が見られた。

(3) 母親の育児感情

得られたデータの3年未満77名と3年以上196名を「母親の育児感情尺度<sup>5)</sup>」で比較分析した結果は表5のとおりである。

表4 母親の子育て意識<sup>4)</sup>の比較とt検定結果

下位尺度	3年未満 (n=77)		3年以上 (n=196)		t 検定
	M	SD	M	SD	
第1因子 育児負担	2.64	.61	2.72	.54	n.s.
第2因子 育児肯定	3.40	.40	3.41	.35	n.s.
第3因子 育児相談	3.08	.63	2.56	.70	$t(271) = 5.74^{***}$
第4因子 友人の支え	2.08	.70	2.61	.42	$t(271) = 7.65^{***}$
第5因子 親族の支え	2.50	.98	2.41	.68	n.s.
第6因子 育児責任	2.58	.49	2.71	.26	$t(271) = 3.02^{**}$

\*\*\* :  $P < .001$  \*\* :  $P < .01$

表5 母親の育児感情<sup>5)</sup>の比較とt検定結果

下位尺度	3年未満 (n=77)		3年以上 (n=196)		t 検定
	M	SD	M	SD	
第1因子 子育て充実感	3.58	.38	3.42	.34	$t(271) = 3.05^{**}$
第2因子 子育て不安感	2.54	.71	2.64	.49	n.s.

\*\* :  $P < .01$

表5より、第1因子「子育て充実感」において、3年未満が3年以上より平均値が高く、 $t(271) = 3.05, p < .01$ で有意な差が見られた。

(4) 母親の育児の振返り

得られたデータの3年未満77名と3年以上196名を「母親の育児の振返り尺度<sup>5)</sup>」で比較分析した結果は表6のとおりである。

表6より、第1因子「子どもへの省察」において、3年未満が3年以上より平均値が高く、 $t(271) = 1.84, p < .10$ の有意な傾向が見られた。

(5) 母親の実際の育児方法

得られたデータの3年未満77名と3年以上196名を「母親の実際の育児方法尺度<sup>5)</sup>」で比較分析した結果は表7のとおりである。

表7より、第1因子「積極的・肯定的関心」において、3年未満が3年以上より平均値が高く、 $t(271) = 2.34, p < .05$ で有意な差が見られた。

(6) 子育て支援に参加して

1) 利用者と未利用者の各評価の出現率

E 1 「友人が増えた」、E 2 「子どもとの遊びの幅が広

がった」、E 3 「子どもへの接し方に余裕がでてきた」、E 4 「参加することが楽しみである」の4項目に対する評価（「よくある」を4点、「ときどきある」を3点、「ほとんどない」を2点、「ない」を1点、無回答を2.5点）の出現人数と出現率を算出した。

① 質問E 1「園の子育て支援に参加して友人が増えた」のデータを3年未満77名と3年以上196名に分けて比較分析した結果は、図3のとおりである。

図3より、肯定的回答とする評価4と評価3の合計は、3年以上が57%、3年未満が61%である。

② 質問E 2「子どもとの遊びの幅が広がった」のデータを3年未満77名と3年以上196名に分けて比較分析した結果は、図4のとおりである。

図4より、肯定的回答とする評価4と評価3の合計は、3年以上が57%、3年未満が56%である。

③ 質問E 3「子どもへの接し方に余裕がでてきた」のデータを3年未満77名と3年以上196名に分けて比較分析した結果は、図5のとおりである。

図5より、肯定的回答とする評価4と評価3の合計は、3年以上が59%、3年未満が53%である。

表6 母親の育児の振返り<sup>5)</sup>の比較とt検定結果

下位尺度	3年未満 (n=77)		3年以上 (n=196)		t 検定
	M	SD	M	SD	
第1因子 子どもへの省察	3.25	.37	3.15	.45	$t(271) = 1.84^+$
第2因子 親自身の省察	3.26	.52	3.25	.52	n.s.
第3因子 他者との比較	3.16	.46	3.18	.49	n.s.

+ : P < .10

表7 母親の実際の育児方法<sup>5)</sup>の比較とt検定結果

下位尺度	3年未満 (n=77)		3年以上 (n=196)		t 検定
	M	SD	M	SD	
第1因子 積極的・肯定的関心	3.20	.46	3.07	.36	$t(271) = 2.34^*$
第2因子 感情的な叱責	2.71	.55	2.80	.61	n.s.

\* : P < .05

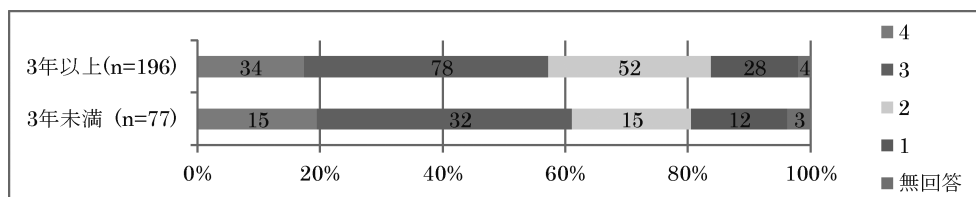


図3 友人が増えた

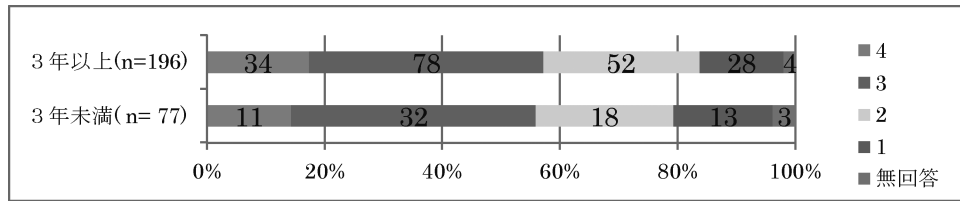


図4 遊びの幅が広がった

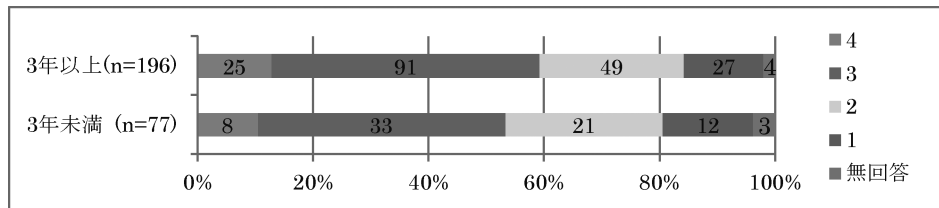


図5 子どもへの接し方に余裕ができた

④ 質問E4「参加することが楽しみである」のデータを3年未満77名と3年以上196名に分けて比較分析した結果は、図6のとおりである。

図6より、肯定的回答とする評価4と評価3の合計は、3年以上が59%、3年未満が61%である。

2) 3年未満と3年以上の評価平均値得点

4つの質問(E1からE4)の3年未満・3年以上の平均得点をt検定した結果は表8のとおりである。

表8より、4つの質問に対する3年未満と3年以上の平均得点に有意な差はなかった。

3. 考察

表4より第3因子「育児相談」において3年未満が3年以上より有意に高い結果であることから、3年未満の

居住者の育児に対する真摯に取り組む態度とともに、子育ての技術不足や育児不安などの悩みが大きいことが明らかになった。さらに第4因子「友人の支え」に有意な差で、3年未満の平均値が3年以上より低い結果が見られることから、3年未満の母親の友人づくり支援の必要性が示唆される。

この「友人の支え」において3年以上の平均値が高い理由には、表2や表3より、3年以上の母親が第2子や第3子を持つ母親が、3年未満より多いことや年齢も高く育児経験や子育て支援を受ける回数も多いと推測されることから、過去における子育て支援の影響が窺える。

また表5より第1因子「子育て充実感」において3年未満の平均値が3年以上より有意に高い結果を示していることと、表6の第1因子「子どもへの省察」において3年未満の平均値が3年以上の平均値より高く、有意な

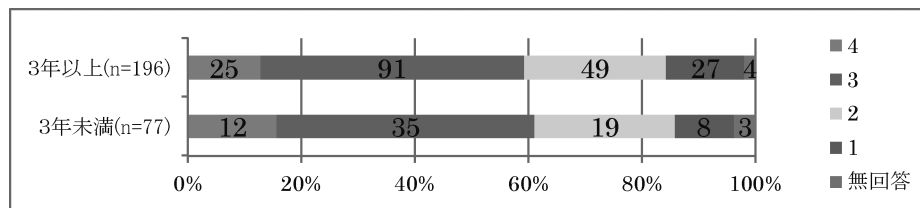


図6 参加することが楽しみである

表8 3年未満・3年以上の平均得点とt検定の結果

下位尺度	3年未満 (n=77)		3年以上 (n=196)		t 検定
	M	SD	M	SD	
E 1 友人が増えた	2.67	.96	2.70	.88	n.s.
E 2 遊びの幅が広がった	2.52	.93	2.61	.93	n.s.
E 3 接し方に余裕ができた	2.50	.88	2.52	.88	n.s.
E 4 参加が楽しみ	2.68	.86	2.53	.88	n.s.

差の傾向を示していることに加え、表7の第1因子「積極的・肯定的関心」において3年未満の平均値が3年以上の平均値より高く有意な差を示していることから次のように考察される。3年未満の母親は、3年以上の母親に比べ、3年未満という慣れない土地での子育てにもかかわらず、子育てをしっかりと見つめながら、積極的にかわり、子育てを肯定的に捉え、子どもと向き合っており、楽しく充実した子育てをしていることが窺える。

さらに3年未満の母親の自由記述の「子育て支援に参加して、子どもは同世代の子どもと遊んだり、私はそのお母さんと知り合えたりできるいい場になっています。」「子どもと触れ合う時間が持て、子どもも私もたくさんの友達と触れ合うことができた。」「子育ては楽しいです。大変なこともたくさんありますが、親子で楽しむように心がけています。」などから、子育て支援に参加することで、積極的な養育態度や子育ての充実感が持てるようになっていくと考察される。

このように得られたデータを居住3年未満と3年以上に分けて分析した結果、3年未満は、積極的・肯定的、充実感ある子育てをしているが、友人の支えが3年以上より少ないことが分かり、対象園で実施している「母親の友人づくり」の子育て支援は、3年未満の母親に必要な子育て支援であると考えられる。

## II. 預かり保育の子育て意識に及ぼす影響

### 1. 分析方法

対象園において子育て支援の初期より実施されている「預かり保育」に視点を置いた。「預かり保育」は代替支援であるといわれ、「親育ち」の視点からの評価は低いとする研究<sup>6)</sup>もあるが、対象園の「預かり保育」は、保護者からの要請で実施に踏み切り、そのことから「認定こども園」になった経緯があることを考慮して、アンケート調査の問1、問3、問4、問6のデータから(1)「園の預かり保育を利用している母親の状況」、(2)「母親の子育て意識」、(3)「母親の育児感情」、(4)「母親の育児の振り返り」、(5)「母親の実際の育児方法」、(6)「子育て支援に参加して」の6観点より分析をする。なお、「母親の子育て意識」、「母親の育児感情」、「母親の育児の振り返り」、「母親の実際の育児方法」については、「預かり保育」の利用者、未利用者の相違による比較分析をし、母親に及ぼす影響を明らかにするものである。さらに、問3、問4の得点については「I. 子育て支援の母親の友人づくりへの影響」と同様に、評価4(よくある) = 4点、評価3(ときどきある) = 3点、評価2(ほとんどない) = 2点、評価1(ない) = 1点とした。

## 2. 調査結果

有効回答数、有効回収率、有効回答者の属性は「1. 子育て支援の母親の友人づくりへの影響」と同様である。

### (1) 園の預かり保育を利用している母親の状況

預かり保育の利用者と未利用者の職業別に比較したのが表9であり、職業別に利用者と未利用者を比較したのが表10である。

表9 利用者・未利用者別の職業による比較人数(%)

利用者 207 (76)	専業主婦	127 (61)
	就業者	80 (39)
未利用者 66 (24)	専業主婦	58 (88)
	就業者	8 (12)

表10 職業別の利用者・未利用者による比較人数(%)

専業主婦 185 (68)	利用者	127 (69)
	未利用者	58 (31)
就業者 88 (32)	利用者	80 (91)
	未利用者	8 (9)

表9より、早朝預かり保育(7:00~9:00)、平常預かり保育(14:00~17:00)、延長預かり保育(17:00~19:00)を合わせて約8割の母親が利用していることが分かる。また預かり保育利用者(以下、利用者と表記する。)は約8割、預かり保育未利用者(以下、未利用者と表記する。)は約2割である。さらに利用者は、専業主婦が6割であり、一方の就業者が4割と少なく示されている。しかし対象園における専業主婦(185名)と就業者(88名)の人数差が大きいと、表10より就業者は9割、専業主婦は7割が利用していることが分かる。さらに表9より未利用者の約9割が専業主婦である。

### (2) 母親の子育て意識

得られたデータを利用者207名と未利用者66名に分けて「母親の子育て意識尺度<sup>4)</sup>」で比較分析した結果は表11のとおりである。なお利用者と未利用者のそれぞれの母親の子育て意識は専業主婦と就業者では異なることが予想されるため、さらに得られたデータを専業主婦と就業者に分け、専業主婦の利用者127名・未利用者58名と、就業者の利用者80名・未利用者8名において、それぞれ「母親の子育て意識尺度<sup>4)</sup>」で比較分析した。その結果、専業主婦の場合は表12、就業者の場合は表13のとおりである。

表 11 利用有無による母親の子育て意識<sup>4)</sup> t 検定結果

下位尺度	利用者 (n=207)		未利用者 (n=66)		t 検定
	M	SD	M	SD	
第 1 因子 育児負担	2.67	.60	2.62	.61	n.s.
第 2 因子 育児肯定	3.38	.37	3.50	.32	t(271) = 2.49**
第 3 因子 育児相談	3.02	.64	3.09	.68	n.s.
第 4 因子 友人の支え	2.15	.66	2.14	.67	n.s.
第 5 因子 親族の支え	2.61	.96	2.71	.97	n.s.
第 6 因子 育児責任	2.57	.56	2.58	.47	n.s.

\*\* : P < .01

表 12 利用有無による母親の子育て意識<sup>4)</sup> t 検定結果 (専業主婦の場合)

下位尺度	利用者 (n=127)		未利用者 (n=58)		t 検定
	M	SD	M	SD	
第 1 因子 育児負担	2.69	.58	2.67	.63	n.s.
第 2 因子 育児肯定	3.37	.36	3.50	.32	t(183) = 2.31*
第 3 因子 育児相談	3.06	.60	3.10	.71	n.s.
第 4 因子 友人の支え	2.11	.66	2.15	.66	n.s.
第 5 因子 親族の支え	2.50	.94	2.71	.97	n.s.
第 6 因子 育児責任	2.66	.50	2.56	.46	n.s.

\* : P < .05

表 13 利用有無による母親の子育て意識<sup>4)</sup> t 検定結果 (就業者の場合)

下位尺度	利用者 (n=80)		未利用者 (n= 8)		t 検定
	M	SD	M	SD	
第 1 因子 育児負担	2.67	.63	3.33	.42	n.s.
第 2 因子 育児肯定	3.39	.38	3.53	.38	n.s.
第 3 因子 育児相談	2.97	.70	3.00	.53	n.s.
第 4 因子 友人の支え	2.22	.66	2.06	.76	n.s.
第 5 因子 親族の支え	2.77	.97	3.50	.53	t(86) = 2.08*
第 6 因子 育児責任	2.42	.61	2.75	.53	n.s.

\* : P < .05

表 11 より、第 2 因子「育児肯定」において、未利用者が利用者より平均値が高く、t(271) = 2.49, p < .01 の有意な差が見られた。

表 12 より、第 2 因子「育児肯定」において、未利用者が利用者より平均値が高く、t(183) = 2.31, p < .05 と有意な差が見られた。

表 13 より第 5 因子「親族の支え」において、就業者の未利用者が利用者より平均値が高く、t(86) = 2.08, p < .05 の有意な差が見られた。

### (3) 母親の育児感情

得られたデータの利用者 207 名と未利用者 66 名を「母親の育児感情尺度<sup>5)</sup>」で比較分析した結果、有意な差は

なかった。さらに専業主婦と就業者に分けて、それぞれの利用者と未利用者において比較分析した結果、有意な差はなかった。

### (4) 母親の育児の振返り

得られたデータの利用者 207 名と未利用者 66 名を「母親の育児の振返り尺度<sup>5)</sup>」で比較分析した結果、有意な差はなかった。さらに専業主婦と就業者に分けて、それぞれの利用者と未利用者において比較分析した結果、有意な差はなかった。

### (5) 母親の実際の育児方法

得られたデータの利用者 207 名と未利用者 66 名を「母



親の実際の育児方法尺度<sup>5)</sup>」で比較分析した結果、有意な差はなかった。さらに専業主婦と就業者に分けて、それぞれの利用者と未利用者において比較分析した結果、有意な差はなかった。

(6) 子育て支援に参加して

1) 利用者と未利用者の各評価の出現率

E 1 「友人が増えた」、E 2 「子どもとの遊びの幅が広がった」、E 3 「子どもへの接し方に余裕がでてきた」、E 4 「参加することが楽しみである」の4項目に対する評価（「よくある」を4点、「ときどきある」を3点、「ほとんどない」を2点、「ない」を1点、無回答を2.5点）の出現人数と出現率を算出した。

① 質問E 1「園の子育て支援に参加して友人が増えた」のデータを利用者207名と未利用者66名に分けて出現人数を比較分析した結果は、図7のとおりである。カイ二乗検定すると $\chi^2(4) = 10.545, p < .05$ で回答には有意な差があった。

図7より肯定的回答とする評価4と評価3の合計は、利用者が62%、未利用者が56%である。

② 質問E 2「子どもとの遊びの幅が広がった」のデー

タを利用者207名と未利用者66名に分けて比較分析した結果は、図8のとおりである。

③ 質問E 3「子どもへの接し方に余裕がでてきた」のデータを利用者207名と未利用者66名に分けて比較分析した結果は、図9のとおりである。

図9より肯定的回答とする評価4と評価3の合計は、利用者が55%、未利用者が42%である。

④ 質問E 4「参加することが楽しみである」のデータを利用者207名と未利用者66名に分けて比較分析した結果は、図10のとおりである。

2) 利用者と未利用者の評価平均値得点

表14に4つの質問（E 1からE 4）の利用者・未利用者の平均得点とt検定の結果を示した。

E 1「友人が増えた」以外の3項目（E 2「子どもとの遊びの幅が広がった」、E 3「子どもへの接し方に余裕がでてきた」、E 4「参加することが楽しみである」）で利用者の得点が未利用者の得点よりも有意に高かった。子育て支援事業に参加することにより、参加者は肯定的評価をしていた。

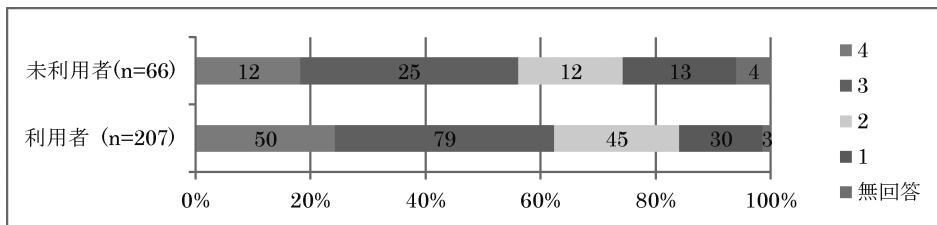


図7 友人が増えた

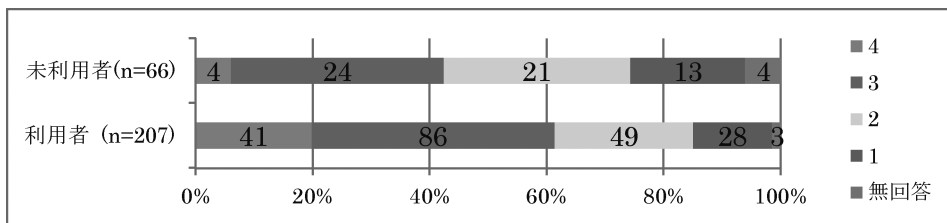


図8 子どもとの遊びの幅が広がった

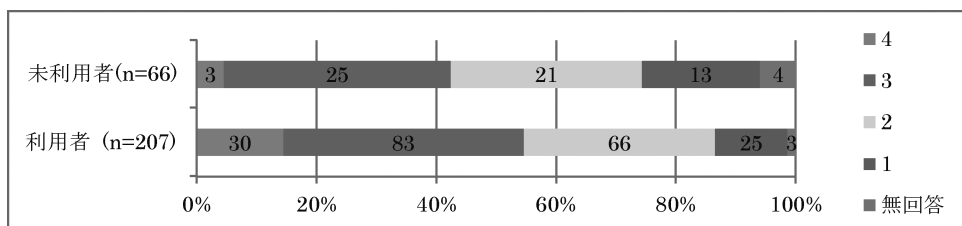


図9 子どもへの接し方に余裕がでてきた

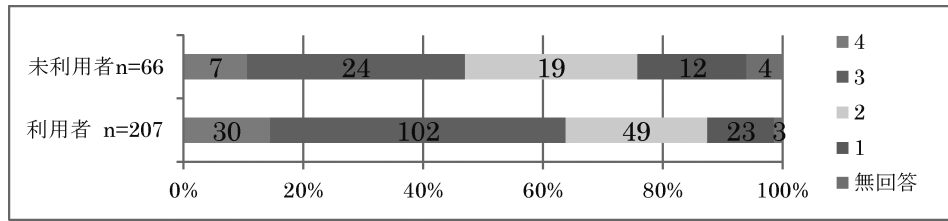


図 10 参加することが楽しみである

表 14 利用者・未利用者の平均得点と t 検定の結果

下位尺度	利用者 (n=207)		未利用者 (n=66)		t 検定
	M	SD	M	SD	
E 1 友人が増えた	2.73	.99	2.56	1.00	n.s.
E 2 遊びの幅が広がった	2.69	.94	2.31	.85	t(271) = 2.89**
E 3 接し方に余裕がでてきた	2.58	.88	2.30	.83	t(271) = 2.32*
E 4 参加が楽しみ	2.68	.85	2.42	.90	t(271) = 2.16*

\*\* : P < .01 \* : P < .05

### 3. 考察

表 9 より約 8 割の母親が預かり保育を利用していることが分かり、表 10 より専業主婦の 7 割が、就業者の 9 割以上が預かり保育を利用していることが分かった。このことから対象園の預かり保育は、就業者にとってはなくてはならない子育て支援であり、専業主婦にとっても必要な支援であると考察される。

表 11 の第 2 因子「育児肯定」において、未利用者が利用者より有意な差で高い結果を示していることから、専業主婦と就業者別に分析した結果、専業主婦と同様、未利用者が利用者より有意な差で高いことから、預かり保育は母親の育児肯定意識に影響を与えていないように考察される。これは、筆者のこれまでの研究<sup>7) 8) 9) 10)</sup>の結果と一致するものである。一方、就業者であるにもかかわらず、預かり保育未利用者である 8 名の母親のことが気にかかるが、表 13 の第 5 因子「親族の支え」において未利用者が利用者より有意に高いことから、親族の支えにより就業が可能となっていると考察される。またこの未利用者の「親族の支え」の平均値の高さが、表 11 の第 2 因子「育児肯定」の未利用者全体の「育児肯定」の平均値に影響していることが示唆される。「母親の育児感情」と「母親の育児の振返り」については、利用者・未利用者全体および、専業主婦・就業者別の比較において有意な差がないことから、預かり保育の影響はないと考察される。一方、良い影響として、図 7 より利用者の回答数が未利用者の回答数よりも有意に高かったことから、子育て支援に参加することにより、友人が増えるという結果と、利用者と未利用者の評価平均値得点において、3 項目 (E 2 「子どもとの遊びの幅が広がった」、E

3 「子どもへの接し方に余裕がでてきた」、E 4 「参加することが楽しみである」) で利用者の得点が未利用者の得点よりも有意に高かったという結果から、子育て支援事業に参加することにより、参加者は肯定的評価をしていることが示唆され、子育て支援の効果が考察された。

これらのことから、「預かり保育の子育て意識に及ぼす影響」は、利用することによる母親の子育て意識への影響は少ないが、8 割以上の母親が利用している実態から、預かり保育の必要性は窺える。さらに自由記述から「預かり保育には、助けられています。」「用事のある時など、利用できる安心感があります。」「急用の時、大変役立って、助かっています。」など、預かり保育の満足感が多く記述されていることから、対象園の子育て支援としての「預かり保育」は必要な支援と考察される。

### まとめと今後の課題

本研究は対象園に通う園児親子の生活環境がニュータウンであることから、まず「母親の友人づくりへの影響」として、居住年数の相違による分析を実施した。その結果、「友人の支え」において 3 年未満が 3 年以上より低いことが分かった。一方で 3 年未満も 3 年以上も約 6 割が子育て支援に参加することによって友人が増えたと回答していることから、子育て支援は友人づくりにより環境を与えていることが明らかである。さらに「母親の育児感情における子育て充実感」、「母親の育児の振返りにおける子どもへの省察」、「母親の実際の育児方法における積極的・肯定的関心」において、3 年未満が 3 年以上より意識が高いことも分かり、慣れない土地での子育てに

もかわらず、子育てを真摯に受け止めて楽しく子育てしている様子が窺えた。

次に、対象園で実施している「預かり保育の子育て意識に及ぼす影響」について分析した結果、約8割の母親が預かり保育を利用しており、職業別では専業主婦が7割、就業者が9割以上利用していることが分かった。このことから対象園の預かり保育は、就業者にとっても専業主婦にとっても必要な支援であると考察された。

さらに「母親の子育て意識における育児肯定」において未利用者が利用者より高い結果を示したことから、預かり保育は母親の育児肯定意識に影響を与えていないように考察された。これは、筆者のこれまでの研究<sup>7) 8) 9) 10)</sup>の結果と一致するものであった。一方就業者であるにもかかわらず、預かり保育未利用者である母親に「親族の支え」が高いことが分かり、それが「母親の子育て意識による育児肯定」の未利用者全体の平均値に影響していることも示唆され、就業者にとって「親族の支え」が大きいことが考察された。また「母親の育児感情」と「母親の育児の振り返り」については、利用者・未利用者の比較において預かり保育の影響はなかったが、8割以上の利用率があり、代替支援としての役割は果たしていると言える。さらに子育て支援の利用者に「友人が増えた」という評価があったことと、「子どもの遊びに幅が広がった」「子どもへの接し方に余裕ができた」「参加が楽しみである」の3項目において、預かり保育の利用者の得点が未利用者の得点よりも有意に高かったことから、子育て支援事業に参加することにより、参加者は肯定的評価をしており、子育て支援の有効性が示唆された。

本研究は対象園の子育て支援の母親に及ぼす影響として「母親の友人づくりへの影響」と「預かり保育の子育て意識に及ぼす影響」についてアンケート調査より考察した。

今後の課題は対象園において地域における子育て支援なども実施しているため、認定こども園における地域の

子育て支援が母親に及ぼす影響も研究対象にしたいと考えている。

## 註

- <sup>1)</sup> 前田正子 (2015)、みんなでつくる子ども・子育て支援新制度－子育てしやすい社会をめざして－ ミネルヴァ書房 p.35
- <sup>2)</sup> 内閣府 子ども子育て支援新制度：子ども・子育て支援新制度 なるほどBOOK (平成26年9月改訂版) [http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/event/publicity/naruhodo\\_book\\_2609.html](http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/event/publicity/naruhodo_book_2609.html) (2015年6月5日)
- <sup>3)</sup> I 幼稚園 (2013)、近畿地区私立幼稚園教員研修大会兵庫大会資料
- <sup>4)</sup> 楠本洋子 (2013)、第8章「子育て支援の効果」、『子育て支援の理論と実践』 ミネルヴァ書房 p.127
- <sup>5)</sup> 中山智哉・春高祐美・木山徹哉・渡邊望 (2013)、「母親の育児感情に影響を及ぼす要因の検討」、『日本保育学会第66回大会発表要旨集』 p.325
- <sup>6)</sup> 楠本洋子、前掲書、p.138
- <sup>7)</sup> 楠本洋子、前掲書、p.137
- <sup>8)</sup> 楠本洋子 (2007)、子育て支援のあり方に関する研究－母親の子育て意識の変容を中心に－ 修士論文 兵庫教育大学 p.80
- <sup>9)</sup> 楠本洋子 (2008)、母親の子育て意識を変容する子育て支援に関する研究 『日本保育学会第61回大会発表要旨集』 p.625
- <sup>10)</sup> 楠本洋子 (2010)、異なる「子育て支援プログラム」における母親に及ぼす効果の相違 『幼年児童教育研究』第22号 兵庫教育大学 p.54

## 付記

本研究は、筆者が日本保育学会第67回大会、第68回大会で発表したものに加筆、修正したものである。

## 謝辞

論文作成に当たり、アンケートにご協力いただきました認定こども園I幼稚園の園長先生はじめ教職員、保護者のみなさんに心からお礼申し上げます。

# A Study on the Effect of a ‘Center for Early Childhood Education and Care’ for Mothers

Yoko Kusumoto

*Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

## Abstract

This research tried 2 approaches to consider the effect exerted on a mother of child rearing support in a Center for Early Childhood Education and Care. That's “effect to mother friend making” and “effect of extra hours for child care”. First “effect to mother friend making” then, a mother of residence for less than 3 years, “with a lot of worries of lack of skills and child rearing anxiety”, and, “Friend's support is little.”, though, “The child rearing which is aggressive and enriches child rearing affirmatively is made child rearing.”, it was considered. Therefore necessity of the child rearing support into which my mother friend making was incorporated was considered.

Next “effect of extra hours for child care” then, I found out that “child-rearing affirmation” is expensive for the person who doesn't use it. The relation with “relative's support” was considered by the reason. It's “extra hours for child care” but it was parallel with the previous study that effect isn't indicated in mother “child rearing affirmation”. But this “extra hours for child care” is support necessary to busy mothers.

**Key words** : Center for Early Childhood Education and Care, child rearing support, mother child rearing consciousness, mother friend making, extra hours for child care